

令和元年6月10日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370199

研究課題名(和文) 源氏学における古典 知 の継承と石出常軒『窺原抄』の成立をめぐる文化学的研究

研究課題名(英文) Inheritance of the classic "knowledge" in Genji Studies and cultural research on the establishment of "Kigensho"

研究代表者

横溝 博 (YOKOMIZO, HIROSHI)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：30303449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：近世の牢屋奉行・石出常軒による『源氏物語』の注釈書が『窺原抄』で、東北大学に完本62冊、内閣文庫に零本13冊が存する。『窺原抄』は『湖月抄』と同時期に出来た大部の『源氏物語』注釈書であり、『岷江入楚』など名だたる注釈書から諸注が集められている上、石出常軒の今案が「私曰～」として豊富につけられるなど、重要な書物である。しかし、本書は稀覯本ということもあって、翻刻はおろか基礎的研究すら十分になされていない現状である。そこで本研究では、東北大本の全翻刻を大目標とし、期間内に桐壺巻から藤裏葉巻までの33巻を翻字した。加えて、石出常軒の源氏学がいかなるものであるのか、全容を明らかにしつつある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『窺原抄』は『湖月抄』と同時期に書かれた大部の『源氏物語』注釈書でありながら、斯界から忘れ去られつつある。近年、江戸期の古典学や注釈のあり方に大きな関心が集まっている中、牢屋奉行であった石出常軒の源氏学を明らかにすることは、儒者や国学者一辺倒の『源氏物語』注釈の研究に、一石を投じることになる上で重要な意義を持つ。本研究は、東北大本を底本に内閣文庫本を校合することで、学術的に信頼するに足る翻刻テキストを提供するものである。『湖月抄』が版行される一方で書かれた『窺原抄』の意義を解明することで、近世源氏学の世界はあらたに描き直されることになるに違いない。

研究成果の概要(英文)：A commentary book of "The Tale of Genji" by Ishide Joken, who was a government office under Japan's Tokugawa shogunate, concerned with the management of prisons, is "Kigensho", and 62 complete books exist at Tohoku University and 13 books exist at the Cabinet Library. "Kigensho" is a commentary book of the great part of "Genji Monogatari" which was made at the same time as "Kogetsusho", and various notes are collected from the annotations such as "Mingonisso". This is an important book, however, since this book is a rare book, neither reprint nor basic research has been sufficiently done. Therefore, in this research, we set the goal for the whole reprint of Tohoku books, and transliterated 33 volumes from 桐壺 to 藤裏葉 within the period. In addition, it is clarifying the whole picture of what kind of thing is the Genji study of Ishide Joken.

研究分野：日本古典文学

キーワード：源氏物語 古注釈 石出常軒 窺原抄 源氏学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者は主として13～14世紀に成立した中世物語(「擬古物語」「中世王朝物語」とも称される)を主たる研究対象とし、日本学術振興会特別研究員の期間を経ては、院政期以降の王朝物語を考察対象として、物語史の総体的な把握を目指して研究活動を展開し今日に至っている。一方、物語の史的研究と並行して、『源氏物語』を始めとする平安文学の注釈及び注釈書(以上は「古注」とか「古注釈」と呼ばれる)の展開に関心を寄せ、いくつかの研究を行い、発表してきている。肥前嶋原松平文庫所蔵『源注』の全文を初めて翻刻し、解題を作成したのは大きな成果である。更には『源注』に一条兼良・肖柏自筆『肖柏問答抄』断簡をも合わせて考察することで、肖柏『弄花抄』成立の一端をも明らかにすることができたのである。

こうした古注釈書の生成と展開に関わる研究は、今日広く行われつつあり、中でも『岷江入楚』や『覚勝院抄』『一簣抄』の研究、そして申請者も共同研究に携わっている『長珊閣書』の翻刻・研究など、とりわけ源氏物語注釈史の要に位置する大部にして諸注集成的な性格を帯びた注釈書の研究が、記述内容も含めて注目されている。それらの研究は注釈史の常識を大きく変革するものとして期待を集める一方、課題も多い。とりわけ翻刻も基本的な解題も整備されていない叙上の注釈書の研究は、源氏物語研究において、最後まで残された重要課題であることは確かである。そうした問題意識が斯界に共有されつつある中、江戸期を代表する『源氏物語』の注釈書である『湖月抄』と同時期に成立した、石出常軒『窺原抄』の存在が、今日すっかり忘れ去られてしまっていることは憂うべきことである。石出常軒『窺原抄』の全容の解明、そして斯界に同書の存在について再認識を促すこと、これが現在の研究状況に照らして喫緊の課題であった。

諸注集成として名高い『岷江入楚』、『源氏物語』の全文をも収めた『覚勝院抄』『長珊閣書』、それらが江戸期には『首書源氏物語』や『湖月抄』に見られるように、注釈を本文とは切り離して頭注とする形式を生み出す基盤となったことは確かであることから、同じく『源氏物語』の全文を収め、諸注集成の性格を併せ持つ『窺原抄』の存在は無視できない。とりわけこれが、北村季吟など国学者や儒者によるものではなく、牢屋奉行を家職として務めた石出常軒の手になる書物であることがきわめて興味深く、『窺原抄』が石出常軒畢生の大著述であることは、子孫が常軒の墓碑銘に刻んでいることから知られる。本書は内閣文庫に端本13冊が、そして東北大学附属図書館に完本62冊が伝わるのみである。石出常軒の事績を含めて、彼の古典学がいかなるものであったか、『窺原抄』は何を目指して作られたのか、『窺原抄』はどのようにして読まれ伝えられたのか。それらの問題はミステリアスでありながら、全容の解明は、忘れられつつある源語注釈史の一断面を確実に掘り起こすことになるものと期待されたのである。

2. 研究の目的

本研究では、石出常軒の『窺原抄』(東北大学附属図書館蔵、62冊)を主たる分析対象として、室町期以降の源氏物語注釈書がいかに継承され、江戸期の新しい注釈書に情報が注ぎ込まれたか、従来の源氏学の「知」の継承と発展という視座に基づきながらも、近年の研究にはない新しい観点を作りだし、導入することを目論むものである。具体的には、未翻刻の『窺原抄』全文を翻刻する。『窺原抄』所引の源氏物語注釈書類を整理し、諸注集成としての『窺原抄』の性格を明らかにするとともに、「私曰」として見られる石出常軒の私説にどのような意義が見いだせるのかを考察する。以上の研究を総合して、『窺原抄』についての新しい解題を作成し、『窺原抄』翻刻と解題(仮)として成果をまとめ斯界に提供する。以上の3点を目的とする。

3. 研究の方法

研究期間を5年に設定し、『窺原抄』の全文翻刻を行う。『窺原抄』の成立を解き明かすと

ともに、『湖月抄』など主要な源語注釈書を相対化する視座をも追求するべく研究を押し進める。その中で、平成26年度以降、『窺原抄』の撮影と翻刻を開始し、同時に書誌的な整理を行う。またそのための環境の整備を行う。最終年度においては、全文の翻刻の完了と、翻刻本文と解題の整理を目指す。一方、学会において具体的な研究成果を報告する。以上、『窺原抄』の翻刻と解題の作成、また研究発表を通して、源氏物語注釈史をめぐる議論の活性化を促し、『窺原抄』を加えての源氏物語注釈史研究の強化と発展を押し進める。

【基礎資料の収集と研究環境の整備】

- 1、『窺原抄』(東北大学附属図書館蔵)全冊の写真撮影を行う。図書館の規則により、指定の業者に依頼しての撮影となる。デジタルによるカラー撮影に加えて、翻刻用のデータとしてDVDの作成を依頼する。また、内閣文庫本の閲覧及び調査を行い、写真撮影を行う。初年度後半から翻刻を開始し、桐壺巻～花散里巻までを翻刻する。次年度以降も含めた翻刻計画は以下の通りである。

平成26年度	...	桐壺～花散里
平成27年度	...	須磨～蛸
平成28年度	...	常夏～若菜下
平成29年度	...	柏木～総角
平成30年度	...	早蕨～夢の浮橋

翻刻作業には研究協力者、大学院生アルバイトを動員する。最終校正は申請者が行う。

- 2、資料調査については、主として国文学研究資料館(東京)に赴き、同館所蔵のマイクロフィルムによって、関係資料の紙焼写真を収集する。また、雑誌論文等のコピーを収集する。
- 3、諸本調査については、内閣文庫本の調査を数度に分けて行う。写本を蔵する内閣文庫に、原本調査を行う。その他、国文学研究資料館にて、近代に写された内閣文庫本の手沢本を調査する。
- 4、本研究に関わる新出資料(特に石出常軒の著作物)があった場合、可能な範囲で調査し、購入するなどして本調査に加える。

以上は、基礎作業として研究期間を通じて共通する内容である。

4. 研究成果

五年間を通して、『窺原抄』の以下の巻巻について、研究協力者3名の助力を得て、翻字を行った。担当者は以下の通りである(カッコ内は翻字チェック担当者)。

『窺原抄 一』桐壺	墨付100丁	横溝(高橋)
『窺原抄 二』篁木上	墨付78丁	久保(横溝)
『窺原抄 三』篁木下	墨付80丁	久保(横溝)
『窺原抄 四』空蝉	墨付29丁	久保(横溝)
『窺原抄 五』夕顔	墨付115丁	高橋(久保)
『窺原抄 六』若紫	墨付95丁	高橋(久保)
『窺原抄 七』末摘花	墨付70丁	横溝(高橋)
『窺原抄 八』紅葉賀	墨付67丁	横溝(高橋)
『窺原抄 九』花宴	墨付30丁	久保(横溝)
『窺原抄 十』葵	墨付99丁	横溝(有馬)
『窺原抄 十一』榊	墨付103丁	横溝(有馬)
『窺原抄 十二』花散里	墨付10丁	横溝(有馬)
『窺原抄 十三』須磨	墨付95丁	久保(高橋)
『窺原抄 十四』明石	墨付79丁	久保(高橋)

『窺原抄 十五』	澪標	墨付 66 丁	高橋 (横溝)
『窺原抄 十六』	蓬生	墨付 42 丁	高橋 (横溝)
『窺原抄 十七』	閑屋	墨付 11 丁	高橋 (横溝)
『窺原抄 十八』	絵合	墨付 44 丁	高橋 (横溝)
『窺原抄 十九』	松風	墨付 50 丁	有馬 (久保)
『窺原抄 二十』	薄雲	墨付 55 丁	有馬 (久保)
『窺原抄 廿一』	槿	墨付 41 丁	有馬 (久保)
『窺原抄 廿二』	乙女	墨付 98 丁	高橋 (有馬)
『窺原抄 廿三』	玉鬘	墨付 83 丁	高橋 (有馬)
『窺原抄 廿四』	初音	墨付 38 丁	横溝 (久保)
『窺原抄 廿五』	胡蝶	墨付 43 丁	横溝 (久保)
『窺原抄 廿六』	螢	墨付 52 丁	横溝 (久保)
『窺原抄 廿七』	常夏	墨付 59 丁	横溝 (久保)
『窺原抄 廿八』	篝火	墨付 9 丁	有馬 (高橋)
『窺原抄 廿九』	野分	墨付 38 丁	有馬 (高橋)
『窺原抄 三十』	行幸	墨付 63 丁	有馬 (高橋)
『窺原抄 三十一』	蘭	墨付 36 丁	有馬 (高橋)
『窺原抄 三十二』	真木柱	墨付 79 丁	久保 (横溝)
『窺原抄 三十三』	梅枝	墨付 46 丁	久保 (横溝)
『窺原抄 三十四』	藤裏葉	墨付 59 丁	久保 (横溝)

翻字作業のサポートとして、当初大学院生を当てていたが、修了するなどして十分な人員が確保できず、主として翻字のみで『源氏物語』第1部までを終えるにとどまった。漢文の引用箇所の翻字に予定以上に時間を費やすこととなり、予定を下回った。ただ、翻字はすべての研究の基礎であるので、詳細な凡例を作成し翻字を行うとともに、翻字チェックに念を入れることで、公開に漕ぎ着けたい。全翻刻は『第二期 源氏物語古註釈叢刊』に収載予定である。

なお、調査期間の間に、内閣文庫蔵本の近代手沢本が、国文学研究資料館のほかに、東海大学桃園文庫に所蔵されていることがあらたに判明した(調査済み)。しかしながら、東北大本の書写本、もしくはそれに関係する諸本については所在を知らない。東北大本の伝来についても詳らかにし得ない。また、内閣文庫本は13冊のみの零本であり、残りの巻の所在が気かりである。引き続き探索に努めたい。

『窺原抄』の奥書を元に、およその成立段階が明らかになった。また、『窺原抄』の引用書目は以下の通りである。

Ishide Jōken's Kigenshshō: Chronology

『窺原抄』成立年譜

延宝七年 (1679)	桐壺～夕顔	} 第一部
八年 (1680)	若紫～明石	
九年 (1681)	澪標～胡蝶	
天和二年 (1682)	螢～藤裏葉	} 第二部
三年 (1683)	若菜上～御法	
四年 (1684)	幻～早蕨	} 第三部
貞享二年 (1685)	宿木～夢浮橋	

『窺原抄』引用書目

- 『岷江入楚』『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』『細流抄』『明星抄』
- 『奥入』『万水一露』『源氏和秘抄』『原中最秘抄』『源氏物語不審抄出』『仙源抄』『源義弁引抄』『孟津抄』『紹巴抄』『休閑抄』

上記を引用したうえ

- 「私曰～」「坦齋曰～」「師伝云～」を加える

ところで、『窺原抄』は『源氏物語』の本文を、注釈項目に細分化した上で、全文を引用しているとされてきた。ところが、本調査により、夕霧巻の注釈が途中で終わっているなど、必ずしも、全巻について、始めから終わりまで注釈が施されているわけではないことが明らかになった。従って、『源氏物語』の本文そのものも全文引用とはなっていないのであるが、中絶している理由については、全巻の翻字と調査が完了したのちに考察したい。また、『窺原抄』は東北大本が唯一の揃い本であるが、内閣文庫本と比較した時、異同のある箇所は、誤写等よる異なりがほと

んどであるが、そのような場合、内閣文庫本のほうが正確であることが多い。一面の行数・字数も異なっていることから、東北大本と内閣文庫本は直接の書写関係にはなく、今となっては零本ながら、内閣文庫本の方がその伝来からしても、清書本として幕府に提出されたものではないかと思われる。さらに内閣文庫本 13 冊について東北大本との校合を行い、異同の様態を明らかにした上、東北大本の素性についても探索したい。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9 件)

横溝 博「『栄花物語』と中世王朝物語の関係について 『風につれなき物語』を例として」, 加藤静子・桜井宏徳編『王朝歴史物語史の構想と展望』, 新典社, pp.524-546, 2015 年 3 月 .

横溝 博「『源氏物語』月光と降雪の美をめぐる覚え書き」, 『平安朝文学研究』復刊第 23 号, pp.36-38, 2015 年 3 月 .

横溝 博「平安時代の『源氏物語』本文 物語は本当に“書写”されたのか」, 助川幸逸郎・立石和宏・土方洋一・松岡智之編『新時代への源氏学 7 複数化する源氏物語』, 竹林舎, pp.36-38, 2015 年 6 月 .

横溝 博「『山路の露』の浮舟と和歌 “手習の君” の継承をめぐって」, 『国文学研究(早稲田大学国文学会)』第 177 集, pp.29-41, 2015 年 10 月 .

横溝 博「後期物語から見る物語史 『源氏物語』の複合的引用と多重化する物語取り」, 助川幸逸郎・立石和宏・土方洋一・松岡智之編『新時代への源氏学 8 物語史 形成の力学』, 竹林舎, pp.165-188, 2016 年 5 月 .

横溝 博「『夜の寝覚』の引歌表現「思ふももの心地」をめぐって 『源氏物語』葵巻の六条御息所との関わりから」, 和田律子・久下裕利編『考えるシリーズ (知の挑発) 平安後期 頼通文化世界を考える 成熟の行方』, pp.407-430, 武蔵野書院, 2016 年 7 月 .

横溝 博「六条斎院禊子内親王家「物語合」の復原 『後拾遺和歌集』の詞書の再検討を通して」, 横溝博・久下裕利編『堤中納言物語の新世界』, pp.25-47, 武蔵野書院, 2017 年 3 月 .

横溝 博「『虫めづる姫君』を読む 冒頭部の解釈をめぐって」, 横溝博・久下裕利編『堤中納言物語の新世界』, pp.69-91, 武蔵野書院, 2017 年 3 月 .

横溝 博「『栄花物語』と平安朝物語の関係 『うつほ物語』の影響、成熟する歴史語り」, 『日本文学研究ジャーナル』第 6 号, pp.6-pp.19, 2018 年

〔学会発表〕(計 7 件)

横溝 博「“*Shōhaku mondōshō*” (Shōhaku's Notes of Questions and Answers): the Shimabara Matsudaira Manuscript and two Fragments」, 単独, 第 4 回日独 6 大学長会議 (HeKKSaGO (ヘキサゴン)), 東北大学, 2015 年 4 月 17 日 .

横溝 博「『源氏物語』の勝利 総合巻から (《Le triomphe du Dit du Genji : un examen du Concours de peintures》)」, 単独, 研究と対話の国際集会「他者のスペクタクル 日仏間の移動と文化的以移り」, 東北大学・グルノーブル・アルプ大学, グルノーブル・アルプ大学 / フランス, 2016 年 10 月 7 日 .

横溝 博「王朝物語史のメルクマール 藤原頼通の時代 (“Mercurmar of The History of Court Literature The Era of FUJIWARA no Yorimichi”）」, 単独, 国際日本学ワークショップ「交響する 知 のネットワーク」, 東北大学・ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学, ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 / ヴェネツィア, 2017 年 3 月 16 日 .

横溝 博「室町期古典注釈における 注 の在りか Classics in the Muromachi Period: The Changing Function of the “Commentary” in Commentaries」, 単独, 2017Eajs 国際会議, リスボン新大学 / ポルトガル, 2017 年 9 月 2 日 .

横溝 博「牢屋奉行の源氏学 石出常軒『窺原鈔』の成立」, 単独, 2017 東北アジア国際言語文化研究基地年次大会 国際シンポジウム「言語文化の交流と影響」, 吉林大学外国語学部 / 中国, 2017 年 9 月 9 日 .

横溝 博「Formation and expression of the author's identity: In the case of Murasaki

Shikibu and The Tale of Genji」, 単独, HeKKSaGOn Workshop on Migration: Multicultural Identities and Social Change, 大阪大学, 2018年4月13日.

横溝 博「散逸『初雪』物語 、『栄花物語』「かかやく藤壺」の背景」, 単独, 中世王朝物語研究会, 中京大学, 2018年8月27日.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：久保 堅一

ローマ字氏名：KUBO KENICHI

研究協力者氏名：高橋 早苗

ローマ字氏名：TAKASHI SANAE

研究協力者氏名：有馬 義貴

ローマ字氏名：ARIMA YOSHITAKA

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。